

大学生の親子間コミュニケーションと
進路選択の自己効力に関する研究
—レジリエンスを媒介した影響の検討—

Study about parents-adolescent communication and
career self-efficacy for university student

澤 聡 一
SAWA Toshikazu

北翔大学教育文化学部研究紀要
第5号 2020

大学生の親子間コミュニケーションと 進路選択の自己効力に関する研究

—レジリエンスを媒介した影響の検討—

Study about parents-adolescent communication and
career self-efficacy for university student

澤 聡 一
SAWA Toshikazu

キーワード：進路選択自己効力，親子間コミュニケーション，レジリエンス

問題と目的

子どもから大人への橋渡しの時期である青年期の重要なライフイベントの一つに、進路選択がある。とりわけ大学生の時期の進路選択は、自分自身の将来の人生の全体を見据えながら職業を選択し、学生から社会人への移行に備えるという意味で、重要な意味を持っている。

厚生労働省と文部科学省による2019年5月の発表によると、大学生（学部卒）の就職（内定）率は97.6%と調査開始以来の2番目の高水準であり、「売り手市場」と言われて久しい状況が続いている。その一方で、2021年卒業生より採用活動の解禁日等を定めたいわゆる「就活ルール」の撤廃が決まり、進路選択の方法がさらに多様化するなかで、「自分がやりたい仕事」よりも「安定」や「楽しく働くこと」を求め、「何が何でも就職したい」という大学生が増加している（マイナビ、2019）など、進路選択に対する価値観もまた変容していることが伺われる。就職率の安定とは裏腹に、現代の大学生は様々な思いを抱えながら進路選択に取り組んでいるといえよう。

そのため、近年の大学教育においては、キャリア・ガイダンスの実施（法制化）やアクティブ・ラーニングの実践等を含むキャリア教育についての新しい取り組みが盛んにおこなわれている。その一方で、約10年にわたり「大学生のキャリア意識調査」を継続実施している溝上（2018）は、大学におけるキャリア教育の近年の改革の意義について触れつつも、「就職や将来に向けての不安が、学び成長する学生の自律のエンジンともいえる二つのライフ（*将来の見通し（future life）と日常での理解実行（present life））につながらず、二つのライフはむしろ落ちてきている」と指摘した。「売り手市場」という社会の状況と、これらの調査結果からみられる大学生の状況との乖離を考えると、今日の大学生の進路選択を支える要因についての研

究の重要性は一層高まっていると考えられる。

大学生の進路選択を検討する際にしばしば用いられている概念の一つに、進路選択自己効力 (career self-efficacy) がある。進路選択自己効力とは、個人が進路を選択・決定するにあたって必要な課題を成功裡に収めることができるという信念 (Betz, 2001) と定義されており、進路選択者の抱える問題や進路選択意識、態度等との間に比較的強い関連がある (富永, 2008) など、多様な調査研究が行われている。たとえば澤 (2018; 2019) は、キャリア教育においてしばしば重視されるコミュニケーション・スキルに注目し、進路選択自己効力とコミュニケーション・スキルの関連についての縦断的調査等を行って、大学の年次によって進路選択自己効力に影響を及ぼすコミュニケーション・スキルが変化する可能性等を報告した。

また、コミュニケーションと進路選択の関連については、上記のように一般的なコミュニケーション・スキルに着目する以外に、特定の他者とのコミュニケーションやその関係に着目した研究もある。たとえば、青年期のアイデンティティ形成を関係性の観点から検討した杉村 (1998) は、「青年は、自分と同じ文脈に生きる家族や仲間、恋人、教師などの身近な他者と相互作用しながら、これらの他者によって示された、その文脈が規定する範囲の選択肢の中から職業やイデオロギーを選択するといえる」と指摘している。

進路選択においては、親子関係は特に重視されている点の一つである。平石 (2007) は、「職業的アイデンティティの探求においては、両親の存在は依然として重要であり、議論を交わす、意見を求める、相談する、支持を求める、などの親との相互交渉を通してアイデンティティの探求と意思決定がなされていると考えられる (平石, 2007, p.81)」と指摘した。

青年期の親子の関係性については様々な議論が行われているが、なかでも近年広く用いられているモデルの一つに、独自性 (individuality) と結合性 (connectedness) の相互作用に注目する立場がある (Cooper & Grotevant, 1987他)。たとえば高橋 (2008; 2009) は、独自性と結合性を因子に加えた進路選択における親子間コミュニケーション尺度を開発し、進路選択時の親子間コミュニケーションの特徴とアイデンティティとの関連について検討している。

このように進路選択やアイデンティティ形成における親子間コミュニケーションの重要性が知られる一方で、親の期待が職業選択の過程で職業不安に影響する (渡部・新井, 2008) など、親子の関係性が進路選択にネガティブな影響を与える可能性も報告されている。また、鹿内 (2012) は、男子学生では親との望ましい関係が職業への構えにポジティブな効果を示した一方で、女子学生では親との望ましくない関係が職業未決定と結びつくことを報告した。これらの結果から、進路選択自己効力に親子間コミュニケーションが及ぼす影響は、コミュニケーションの内容や大学生自身の要因によっても変化することが予想される。特に後者の大学生自身の要因に関していえば、現代社会を生きる大学生の進路選択においては、不安とストレスに満ちた社会を生きるための防御因子に注目することも重要だろう。

日々続く将来に向けての不安や、思い通りにいかない就職活動などの慢性的なストレスを抱えながら、現在必要な課題に取り組むうえで重要な力として近年注目されている概念に、レジ

リエンス (resilience) がある。レジリエンスの定義は多種多様であるが、たとえばアメリカ心理学会 (APA, 2014) は、レジリエンスの構成要素として「現実的な計画の立案と遂行能力」「自己の肯定的な捉えと能力や強みへの自信」「コミュニケーションと問題解決スキル」「感情や衝動制御能力」の4点を挙げている。また平野 (2015) は、多様な定義の存在に触れながらも「ストレスフルな出来事や状況の中でも潰れることなく適応し、また、精神的な傷つきから立ち直ることのできる個人の力」と包括的な説明を試みている。

レジリエンスと進路選択の関連についての研究は本邦ではそれほど多く行われていないが、児玉 (2015) は「キャリア形成を脅かすリスクに直面した時、それに対処してキャリア形成を促す働きをする心理的特性」としてのキャリアレジリエンスに注目し、構成概念の検討を行っている。なおレジリエンスには生得的・資質的な要因 (I AM factor) と、後天的・獲得的要因 (I CAN factor) があることが知られており、キャリアレジリエンスにもこの二つの因子が含まれているとされている。児玉 (2015) のキャリアレジリエンス研究は社会人を対象に実施されているが、大学生の進路選択においてもレジリエンスは進路選択や移行に伴うストレスから大学生を保護し、親子間のコミュニケーション等を通して進路選択自己効力を高めていく上で大きな役割を果たしていることが想像できる。

以上の点から本研究は、親子間コミュニケーションが進路選択自己効力に及ぼす影響を検討する際に、レジリエンスが介在していることを仮定した。なお、これらの2つの心理学概念が進路選択自己効力に及ぼす影響を検討することは、進路選択における環境要因 (親子間コミュニケーション) と個人要因 (レジリエンス) の関連について検討することにもなると考えられるため、進路選択自己効力に対する環境要因と個人要因という観点からも、考察を行った。

方法

調査対象者・手続き 私立A大学に在籍する1～4年生474名を対象に、2019年度当初のキャリア・ガイダンスにおいて、進路選択に対する自己効力尺度 (浦上, 1995) および認知された親子間コミュニケーション尺度 (平石, 2007) を実施した。

一方、二次元レジリエンス要因尺度 (平野, 2015) は、A大学の1～4年生が受講する心理学系の基礎教養講義時に講義の一環として実施したものを回収した。2017～2018年の3年間において、合計412名が対象となった。

進路選択に対する自己効力尺度および認知された親子間コミュニケーション尺度と、二次元レジリエンス要因尺度の対象者のデータをマッチングさせ、回答に不備のあるものを分析の対象から除いた結果、有効回答数は80件であった。

材料 以下の3つの尺度を用いた。なお、以降の統計的検定と図表の作成には、HAD16 (清水・村山・大坊, 2006) を用いた。

進路選択に対する自己効力尺度（浦上，1995）

Taylor and Betz (1983) の Career Decision-Making Self-Efficacy Scale : CDMSE 等を参考に作成された「進路選択に対する自己効力尺度（浦上，1993）」を改訂した浦上（1995）の尺度を用いた。主成分分析の結果，すべての項目の因子負荷量が.44を超える単一因子の尺度であることが確認された（ $\alpha = .943$ ）ため，以降の分析では原尺度と同様の1因子構造の尺度として用いた（項目例「自分の理想の仕事を思い浮かべること」「両親や友達が勧める職業であっても，自分の適性や能力にあっていないと感じるものであれば断ること」）。

認知された親子間コミュニケーション尺度（平石，2007）

認知された親子間のコミュニケーションについて，2因子（独自性，結合性）4水準（独自性：自己主張／分離，結合性：滲透性／相互性）を評価可能とする心理尺度である。

原尺度が十年以上前の尺度であることを考慮し，原尺度と同じ2因子構造を想定した最尤法 Promax 回転による確認的因子分析を実施した。その結果，複数の因子に.30以上の因子負荷量を示した4項目を削除し，再度同様の分析を行った。結果を表1に示す。

第1因子は親に対して自分の意見を述べるといった8項目から構成されており，原尺度における「独自性」因子にほぼ相当すると考え，「独自性」因子と命名した（ $\alpha = .947$ ）。第2因子は親に対する配慮や意見の受け入れといった8項目から構成されており，同様に原尺度における「結合性」にほぼ相当すると考え，「結合性」因子と命名した（ $\alpha = .873$ ）。なお，

表1. 認知された親子間コミュニケーション尺度の因子分析結果

	I	II
I. 独自性		
私は親に対して遠慮なく反対意見を述べている	.968	-.128
私は親の考えに賛成できないときにはそれをはっきりと言う	.912	-.164
私は親の考えに対してためらわずに反論することができる	.870	-.191
私は自分の意見を親にためらわずに言っている	.834	.036
私は親と意見が合わないときにはそれをはっきりと話している	.797	.050
私は親に自分の気持ちをはっきりと言うことができる	.763	.195
私は親に自己主張することができる	.703	.184
私は親に自分の言いたいことをはっきり言っている	.653	.277
II. 結合性		
私は親の気もちに気を配るようにしている	-.112	.894
私は親の気持ちを考えながら話すことがある	-.050	.743
私は親と意見が合うように心がけて話している	-.272	.715
私は親の意見を大切にするようにしている	.194	.653
私は親が話すときにはきちんと聞くようにしている	.093	.642
私は親の考えに賛成したり，同意している	.141	.586
私は親の意見を受け入れることができる	.218	.569
私は親の気持ちをくみとりながら意見を述べている	.166	.467

原尺度において規定されている4水準については，本研究では用いなかった。

二次元レジリエンス要因尺度（平野，2015）

レジリエンスについて、2つの下位尺度（資質的要因、獲得的要因）と7因子（資質的要因：楽観性／統御力／社交性／行動力，獲得的要因：問題解決志向／自己理解／他者心理の理解）を評価可能とする心理尺度である。

本研究では下位尺度ごとの検討を試みるため、レジリエンス（資質的要因）とレジリエンス（獲得的要因）ごとに主成分分析を実施した。分析の結果、レジリエンス（資質的要因）はすべての項目が.40以上の因子負荷量を示したため（ $\alpha = .840$ ），以降の分析では原尺度通りの項目を用いた（項目例「どんなことでも、たいてい何とかかなりそうな気がする」「昔から、人との関係を取るのが上手だ」）。一方、レジリエンス（獲得的要因）は十分な負荷量を示さなかった2項目を除外し、7項目から成る尺度として用いた（ $\alpha = .806$ ）（項目例「嫌な出来事があった時、今の経験から得られるものを探す」「人の気持ちや、微妙な表情の変化を読み取るのが上手だ」）。なお、原尺度において規定されている6因子は、本研究では用いなかった。

結果と考察

進路選択に対する自己効力尺度（以下、進路選択自己効力）および認知された親子間コミュニケーション尺度（以下、親子間コミュニケーション尺度）、二次元レジリエンス要因尺度（以下、レジリエンス尺度）の各因子間の相関係数と、平均値および標準偏差を表2に記す。

表2. 各因子の基本統計量及び相関係数

	Mean	SD	進路選択自己効力	親子間コミュニケーション (独自性)	親子間コミュニケーション (結合性)	レジリエンス (資質的要因)	レジリエンス (獲得的要因)
進路選択自己効力	77.56	14.07	—				
親子間コミュニケーション (独自性)	31.96	6.59	.414	—			
親子間コミュニケーション (結合性)	30.88	5.23	.479	.664	—		
レジリエンス (資質的要因)	38.22	7.67	.561	.342	.280	—	
レジリエンス (獲得的要因)	24.20	4.73	.401	.297	.317	.569	—

いずれの因子間においても、弱～比較的強い正の相関係数が示された（ $r = .280 \sim .664$ ）。

次に、進路選択自己効力を目的変数とし、親子間コミュニケーション尺度の2因子（独自性・結合性）とレジリエンス尺度の2因子（資質的要因・獲得的要因）を説明変数とする重回帰分析（強制投入法）を実施した。結果を表3に示す。

説明変数間の相関係数（表2）の中には比較的

表3. 進路選択自己効力を目的変数とする重回帰分析の結果

	β
親子間コミュニケーション (独自性)	.044
親子間コミュニケーション (結合性)	.316 **
レジリエンス (資質的要因)	.435 **
レジリエンス (獲得的要因)	.041
R^2	.429 **

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

強い相関関係も示されたが、多重共線性の問題は示唆されなかった。重回帰分析の結果、モデル全体の重決定係数 R^2 は.429であり、1%水準で有意だった。また、有意な標準回帰係数 β を示したのは、レジリエンス（資質的要因）と親子間コミュニケーション（結合性）のみであった。

この結果を踏まえて、進路選択自己効力を目的変数、親子間コミュニケーション（結合性）を説明変数、レジリエンス（資質的要因）を媒介変数とする媒介分析を行った。結果を図1に示す。

レジリエンス（資質的要因）を媒介させることで、媒介させる前に比べて親子間コミュニケーション（結合性）が進路選択自己効力に与える影響は.48 ($p < .01$) から.35 ($p < .01$) へ変化した。レジリエンス（資質的要因）の間接効果は.13であった。この間接効果の検定のためにSobel検定を行った結果、間接効果は有意であることが示された ($z = 2.27, p < .05$)。

媒介分析の結果、親子間コミュニケーション（結合性）がレジリエンス（資質的要因）を部分的に媒介して進路選択自己効力に影響を及ぼしているというモデルの妥当性が支持された。その一方で、親子間コミュニケーション（独自性）とレジリエンス（獲得的要因）が進路選択自己効力に及ぼす影響は確認されなかった。「親子間コミュニケーションがレジリエンスを媒介して進路選択自己効力に影響を及ぼす」という本研究の仮説は、部分的に支持されたといえよう。

以降の考察では、はじめに環境要因としての親子関係と個人要因としてのレジリエンスの双方において、特定の因子のみが進路選択自己効力に影響を及ぼした背景について考察するとともに、媒介モデルについての検討を行う。

親子間コミュニケーションの影響の検討

進路選択では、自立のテーマとの関連から親子間コミュニケーション（独自性）が進路選択自己効力とより強い関係を示す可能性も想像されるが、本研究の結果は独自性ではなく親子間コミュニケーション（結合性）が進路選択自己効力に有意な正の影響を及ぼすことを示した。

親子間コミュニケーションのうち、結合性は親の意見や気持ちを汲み取るコミュニケーションであると同時に、親に敬意を払う関係の在り方を示している。なお、尺度の種類こそ異なるが、同様に親子間コミュニケーションに関する心理尺度を用いた高橋（2008；2009）においても、親との結合性が青年のアイデンティティに影響を及ぼしていたことが報告されている。不安を抱えながら社会に向かおうとする大学生にとって、自身の責任の下自己主張を行う独自性よりも、周囲とより良い関係を築いていこうとする結合性の方が、自己効力を高めることとの

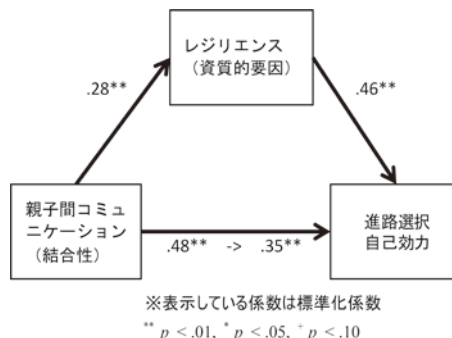


図1. 親子間コミュニケーションがレジリエンスを媒介して進路選択自己効力に及ぼす影響

関連が強いのかもしれない。

関連して、大学生とその保護者との関係についてベネッセ(2016)は、「自分でものごとを決め、問題を解決する学生が減少し、保護者に頼る学生が増加している」と報告している。親子間コミュニケーション(結合性)と進路選択自己効力の関係については、このような親子の関係性の変化からも影響を受けているのかもしれない。

なお、ベネッセ(2012)は、大学4年生の保護者の4割が子どもの進路に関する情報収集をしている一方で、就職に関して親ができることは少ないと感じた保護者が7割いたことを報告している。子は親に支援を求める一方で、親は何をしてよいのか分からないのかもしれない。このミスマッチを解消することが、大学生の進路選択において重要である可能性がある。進路選択において特に重要な親子間のコミュニケーションが結合性であることが示されたことを踏まえると、子である大学生の決断を親が保障するというプロセス(結合的なコミュニケーション)を経て、進路選択自己効力が高まるのかもしれない。

レジリエンスの影響の検討

一方のレジリエンスについても、進路選択の課題に対するには問題解決志向や自己理解などを含む獲得的要因の方が関係が強いことが想像されるが、本研究の結果からは楽観性や統御力などを含む資質的要因が進路選択自己効力に強い影響を与えている可能性を示した。

溝上(2018)は、「大学生のキャリア意識調査」の縦断的調査の結果から、大学生のキャリア意識は4年間で変わるものではなく、大学1年生の結果のまま移行していく可能性を示唆している。同調査では、大学生のキャリア意識は中高生の時期から考え始められることも指摘されており、人生早期から将来の不安にかかわる力という意味で、レジリエンス(資質的要因)との関連が示唆されたのかもしれない。また、大学生にとって、レジリエンス(獲得的要因)の下位因子として想定されている問題解決志向や自己理解、他者心理の理解等よりも、レジリエンス(資質的要因)の下位因子である社交性や楽観性等の方が、進路選択に直接かかわる「強み」として認知されやすいのかもしれない。採用企業と就職活動をする大学生の間には、学生の自己評価と企業評価などに大きなギャップがあると報告されている(リクルート, 2018)。進路選択におけるレジリエンスの影響を客観的に評価するためには、進路選択自己効力などの自己評価のほかにも客観的な評価指標が求められるのかもしれない。

親子間コミュニケーションが進路選択自己効力に及ぼす影響のレジリエンスの媒介効果の検討

親子間コミュニケーションが進路選択自己効力に影響を及ぼしていることは先行研究から知られていたが、本研究の結果から、進路選択等をめぐるストレスからの防御因子であるレジリエンスによる媒介効果を想定した方が、説明力が高まることが示された。なお、親子間コミュニケーション(結合性)単独でも有意な正の影響を示していることから、レジリエンス(資質的要因)の効果は部分的な媒介効果であると考えられる。

この知見は、たとえば大学生のキャリア支援の在り方を考えるうえで有用かもしれない。一つには、進路選択に関する親子のコミュニケーションの重要性を示しているが、進路や将来に高い不安や就職活動にストレスを感じている大学生には、親子で話をする以前にレジリエンスを高めていくことが求められる。ここで高めることが求められるレジリエンスは、後天的に獲得可能なものではなく、本人自身が生得的に持っている強みである。キャリア教育では、必ずと言ってよいほど「自己理解」が求められるが、とりわけ学生自身の強みを見出していくアプローチが重要と考えられる。自ら強みを発見していくことが困難な大学生には、学生相談などの専門家による支援も有用だろう。自身の強みの発見（気づき）を経てこそ親子の進路に関するコミュニケーションが大きな効果を持つということを意識して、学生本人と学生の保護者に働きかけていくことが、大学のキャリア教育では有用である可能性がある。

また、家庭におけるキャリア支援においても、同様のことが言えるだろう。異なる時代を生きた親と子が現代の進路選択や就職活動等について話し合うよりも以前に、子自身が生来的に備えていた強みを親が見出し、進路選択等に活用していくというコミュニケーションのあり方は、大学生を幼いころから見ていた親だけが可能なアプローチでもある。先述したベネッセ(2012)の調査が示す大学生の就職に強い関心を持ちながらも「できることが少ない」と感じている多くの親にとって、本研究の知見を活用することは家庭におけるキャリア支援の在り方を考える一助となるかもしれない。

今後の課題

本研究の対象者には若干名の大学4年生が含まれてはいるが、大多数は3年生以前であり、その多くは就職活動まで一定の期間があると認知していると思われる。また、A大学のなかには教職等の資格取得を目標としている学生が多数在籍しており、その点においても本研究の対象者が十分に本研究の目的に即した対象者であるとは判断しがたい面がある。今後は十分な対象者数の確保とともにこれらの対象者の質的側面にも留意し、知見を積み重ねていく必要があるだろう。

加えて、親子間コミュニケーションとレジリエンスが進路選択自己効力に及ぼす影響のモデルについても、親子間コミュニケーション（独自性）やレジリエンス（獲得的要因）の効果が相関のほかには見出されなかった点についても、今後の検討を要する点と考えられる。特に後天的に獲得したレジリエンスが進路選択や就職活動にどのような影響を及ぼしているのか、進路選択自己効力以外にも客観的な行動指標を用いるなど更なる検討が求められる。

<付記>

本報告をまとめるにあたり、日本学術振興会平成29年度科学研究費助成事業（基盤研究C、課題番号17K04437）の助成を受けました。また、調査協力者の皆様およびA大学キャリア支

援センターの皆様，その他関係の皆様に，この場をお借りして深く御礼申し上げます。

文献

- American Psychological Association (APA) (2014). The Road to Resilience. <https://studentsuccess.unc.edu/files/2015/08/The-Road-to-Resiliency.pdf>
- ベネッセ (2012). 大学生の保護者に関する調査 [2012年] <https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=3165>
- ベネッセ (2016). 第3回 大学生の学習・生活実態調査報告書 [2016年] <https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=5169>
- Betz, N. E. (2001). Career self-efficacy. In Frederick, T. L., & Leong, A. B. (Eds.) Contemporary models in vocational psychology: a volume in honor of Samuel H. Osipow. NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 55-77.
- Cooper, C. R., & Grotevant, H. D. (1987). Gender issues in the interface of family experience and adolescents' friendship and dating identity. *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 247-264.
- 平石賢二 (2007). 青年期の親子間コミュニケーション ナカニシヤ出版
- 平野真理 (2015). レジリエンスは身につけられるか 東京大学出版会
- 児玉真樹子 (2015). キャリアレジリエンスの構成概念の検討と測定尺度の開発 心理学研究, 86, 150-159.
- マイナビ (2019). 2020年卒マイナビ大学生就職意識調査 http://mcs.mynavi.jp/enq/ishiki/data/ishiki_2020.pdf
- 溝上慎一 (2018). 大学生白書2018 東信堂
- リクルート (2018). 就職白書2018 https://data.recruitcareer.co.jp/white_paper_article/20180323001/
- 澤 聡一 (2018). 大学生のコミュニケーション・スキルと進路選択に対する自己効力との関連 北翔大学教育文化学部紀要, 3, 157-172.
- 澤 聡一 (2019). 大学生のコミュニケーション・スキルと進路選択の自己効力に関する縦断的調査—一般学生およびASD困り感が高い学生へのキャリア支援の検討— 北翔大学教育文化学部紀要, 4, 87-100.
- 鹿内啓子 (2012). 大学生における親との関係と職業未決定および就活不安との関連 北星学園大学文学部北星論集, 56, 1-11.
- 清水裕士・村山 綾・大坊郁夫 (2006). 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析 (1) コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用 電子情報通信学会技術研究報告, 106 (146), 1-6.
- 杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し

発達心理学研究, 9, 45-55.

高橋 彩 (2008). 男子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究, 16 (2), 159-170.

高橋 彩 (2009). 女子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究, 17 (2), 208-219.

Taylor, K. M., & Betz, N. E. (1983). Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 22, 63-81.

富永美佐子 (2008). 進路選択自己効力に関する研究の現状と課題 キャリア教育研究, 25, 97-111.

浦上昌則 (1993). 進路選択に対する自己効力と進路成熟の関連 教育心理学研究, 41, 358-364.

浦上昌則 (1995). 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, 42, 115-126.

渡部雪子・新井邦二郎 (2008). 親の期待研究の動向と展望 筑波大学心理学研究, 36, 75-83.